両親の夫婦関係に対する青年の認知の変化について
――青年期後期を対象として――

佐　藤　優　花

臨床心理学研究　東京国際大学大学院臨床心理学研究科　第 17 号　抜刷
2019 年（平成 31 年）3 月 31 日

両親の夫婦関係に対する青年の認知の変化について
――青年期後期を対象として――

佐　藤　優　花

目　次

Ⅰ．研究史
1. 両親の夫婦関係と青年の認知に関する先行研究　量的研究
2. 両親の夫婦関係と青年の認知に関する先行研究　質的研究
3. 青年期の両親からの離脱に関する先行研究
Ⅱ．問題と目的
Ⅲ．方法
1. 調査対象
2. 調査期間
3. 調査方法
4. 調査内容
5. 分析方法
6. 倫理的配慮
Ⅳ．結果
1. 調査対象者の概要
2. 概念とカテゴリーの説明
3. 青年の認知の変化のプロセスを示した結果図
4. ストーリーライン
Ⅴ．考察
1. カテゴリーについての考察
A. 12-15歳頃の両親の夫婦関係に関する認知・印象について
B. 青年の自立後の青年・両親の夫婦関係の変化
C. 12-15歳の頃から現在にかけての両親・両親の夫婦関係についての見方の変化
D. 現在の両親の夫婦関係に対する認知・印象
2. 全体考察
3. 本研究の課題と今後の展望について

要　約

本研究では，両親からの離脱が完了の段階にあるだろう青年期後期の22歳以降30歳未満の青年を対象にインタビュー調査を依頼し，半構造化面接により，両親の夫婦関係について12-15歳頃から現在に至るまでを想起しながら語ってもらうことで，青年の両親の夫婦関係に対する認知が両親からの離脱を通してどのように変化するかを検討することとした。青年の認知の変化のプロセスを示した結果図とストーリーラインを作成した結果、青年の最終的な変化は，大きく2つが上げられた。ひとつは，両親の夫婦関係に干渉しない，さらに言えば両親の夫婦関係の継続のために，間を積極的には取り持とうとはしなくなることであった。ふたつめは，長年連れ添い家族内で発生する問題を乗り越えてきた両親の夫婦関係に信頼感を抱き，青年がこの時期にパートナーとの関係を模索する際，両親の夫婦関係を参考にすることであった。

＊臨床心理学研究科 博士課程（前期）

Ⅰ．研究史

1．両親の夫婦関係と青年の認知に関する先行研究　量的研究

青年が認知した両親の関係について，宇都宮（1999）によれば，「彼らの目に映る両親の夫婦関係は，青年期の心理適応はもとより，将来の配偶者選択の意思決定や結婚相手とのパートナーシップにも何らかの影響を有すると思われ，わが国でも実証研究の蓄積が期待されるところである」としている。欧米においても日本においても，両親の夫婦関係と青年の結婚観・恋愛関係に注目した研究がいくつか行われてきた。また，青年期と両親の関係について，川島ら（2008）は，「子どもが自らとその養育者を客観視し始め，養育者を自分の親であると同時に夫婦のモデルとして認識する時期でもある」としている。このように，青年期における両親の関係は，青年の適応に重要な影響を及ぼすと考えられている。Grych & Fincham（1993）は，「実際の夫婦関係よりも子どもの目に映る夫婦関係のほうが，子どもの発達にとって重要な意味を持つ」としている。

青年の認知した両親の夫婦関係についての研究としては，両親間葛藤と子どもの適応についてGrych & Fimcham（1992）が，CPIC（Children's Perception of Interparental Conflict）尺度を作成した。これは子どもによる両親間葛藤の認知を，葛藤の「頻度（frequency）」，「激しさ（intensity）」，「解決（resolution）」，「内容（content）」からなる「葛藤の側面」，子どもの「認知された恐怖（perceived threat）」，「コーピングの効力感（coping efficacy）」，「自己非難（self-blame）」，「三角関係（triangulation）」，「安定性（stability）」からなる「葛藤の評価」に大別している。日本ではこれを用いて，川島・眞栄城・菅原・酒井・伊藤（2008）は，両親間葛藤認知尺度を作成し，「男女ともに両親間葛藤が深刻なほど葛藤への巻き込まれ感が強まり，さらに両親の夫婦間葛藤に対する自己非難や恐れの認知につながっている」ことを示した。また，「両親間の葛藤の性質のみでなく，それについてどのような立場をとろうとするのか，どのように捉えるのかによって青年の適応への影響は異なることが示された」としている。

また，日本においてはほかに，宇都宮（1999）が，青年の視点から見た両親の夫婦関係に着目し，「親子関係と家族システムのいずれにおいても，両親の夫婦関係と密接なつながりがある」ことを示唆した。また宇都宮（2004）では，両親の結婚生活に対するコミットメントの認知に，父母ともに「存在の全的受容性･非代替性」，「社会的圧力・無力感」，「永続性の観念・集団志向」，「物質的依存・効率性」を抽出し，両親の結婚生活コミットメント認知尺度を作成しており，これを用いて，「不安の高い女子青年の特徴は，両親ともに「存在の全的受容性・非代替性」が低く，「社会的圧力・無力感」が高い」ことがあげられ，「不安の低い女子青年の場合は，両親ともに「存在の全的受容性･非代替性」が高く，「社会的圧力・無力感」が低いことに加え，とりわけ母親に対してその傾向が強いことが特徴としてうかがわれる」としている。

また，両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響として，山内・伊藤（2008）は，両親の夫婦関係が青年の結婚観に与える影響として，両親の夫婦関係への青年の主観的評価に影響されない，連合学習のようなシンプルなメカニズムによって直接的に影響する「直接ルート」と，両親の夫婦関係に対する青年の主観的評価が高い場合に青年自身の恋愛関係を媒介して間接的に影響する「モデリングルート」があることを示している。

以上から，青年の認知する両親の夫婦関係に関する研究は，日本においては十分に行われたと述べることはできないだろう。また，思春期から青年期の後期までを通して，青年が自立を遂げていくのに伴い，両親の夫婦関係の捉え方も変化していくものと考えられるが，これらの研究からは明らかにされていない。

2. 両親の夫婦関係と青年の認知に関する先行研究　質的研究

稲村・横山（2010）は，「青年期における両親の夫婦関係表象の変化体験」について，青年期末期の健常群の男女を対象に，FITの作成とインタビューを通して分析している。稲村ら（2010）は，両親の夫婦関係表象の変化体験には，「両親自体が変化したという体験的側面」と「自分自身が成長して変化したという体験的側面」があると考えた。特に，青年自身が成長して変化したという体験の側面について，「彼らは，親を絶対的な庇護者としていた時期に別れを告げ，親のいい面ばかりでなく別の面も見られるようになって来る」こと，「こうした中で両親の夫婦関係というものが少しずつわかってきたと感じるようであった」ことを述べた。また，彼らの両親の夫婦関係の変化において，「少なくとも青年らの中には，自分自身の変化が大きく，両親の関係性そのものはあまり変化していないのかもしれないという認知があった」としている。これは，「両親を批判的な目で見られるようになることで，不完全な親同士が互いに関わりあって夫婦関係ができているということがわかり始める」ためであるとした。また，稲村ら（2010）がKJ法を用いて，青年期において10歳からの夫婦関係表象の変化がどう体験されているかを分析した図が以下である（**図1**）。

この研究からは，思春期から青年期後期までを通して，青年が自立を遂げていくのに伴い，両親の夫婦関係の捉え方も変化していくことが示されており，また両親の夫婦関係表象の変化に関して，青年は自身の変化によってその見方が変化したのではないかということに，自覚的でもあるようであった。このように，青年期末期に青年の両親の夫婦関係表象には変化が見られるとする研究もあるが，日本ではいまだに青年における両親の夫婦関係の認知やその変化に関する質的研究は十分に行われていないと考えられる。

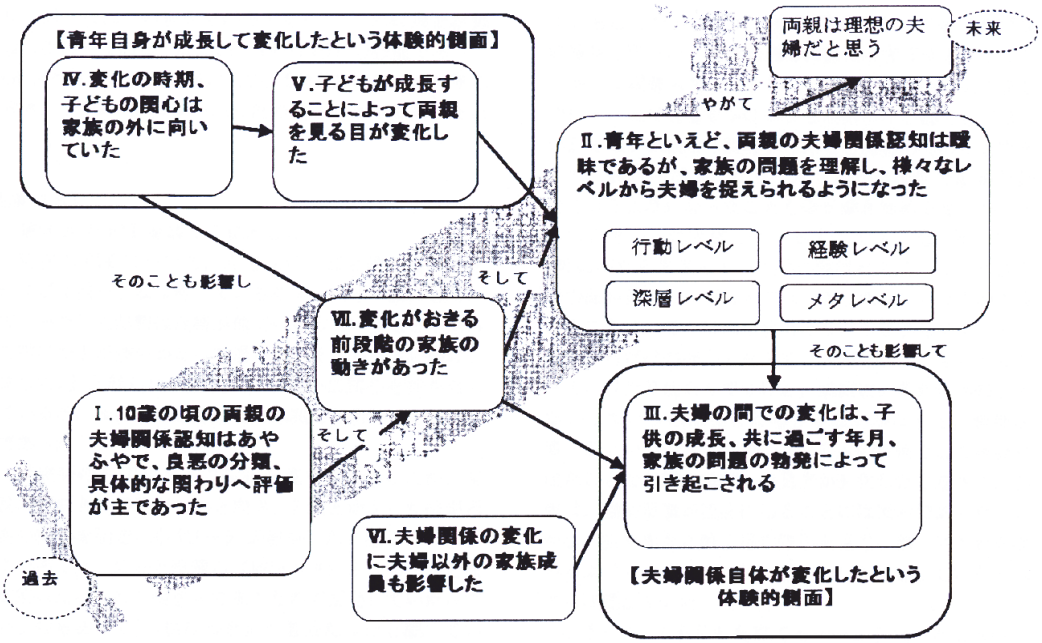

図1　青年期において10歳からの夫婦関係像の変化はどのように体験されているか（稲村・横山，2010）

3. 青年期の両親からの離脱に関する先行研究

以下本論文では，adolescenceを青年期とするが，引用部においては，原文ままの表記を記載している。

「早かれおそかれ，青年は親との間に今まであった密接な情緒的関係から身をひきはじめる」（笠原，2011）。「幼少時期において安定していた両親への依存関係を少しずつ軽減し，依存愛情対象に別れを告げて，新たな家族外の愛情対象を見つけ出す準備をしつつ，自らの道を歩みだす過程が青春期（adolescence）の流れである」（小此木，1980）。

「青年期を表すことばにはこの他思春期，青春期，モラトリアム（猶予期間）等がある」（西村，1978）。皆川（1980）は，pubertyを思春期，pre adolescenceを前青春期，early, middle, late adolescenceをそれぞれ，初期・中期・後期青春期，post adolescenceを後青春期と呼ぶことにするとし，また，後期青春期は青年期，後青春期は初期成人期と同義語とするとした。また，思春期と青春期を明確に区別したBlos, P.（1967）によれば，「思春期（puberty）は，身長・体重の増加，基礎代謝の増加，内分泌系の変化の成長を意味するもので，青春期（adolescence）は，生物学上の変化思春期への心理的適応の過程である」と定義される。

皆川（1985）は，思春期の始まりについて，第二次性徴が現れ始めると，依存愛着対象として，もはや異性の親を使うことが難しくなり，近親相姦禁忌のおきてが再び作動してくるために，自然に親イメージに備給されていたリビドーを撤去しはじめる必要があると述べている。ここにおいて，両親からの脱備給が起こり始める。また小此木（1980）は，後青春期（post adolescence）において，これは青春期と成人期の移行期であり，「両親からの精神的離脱，両性傾向葛藤の解消，自我理想の確立，性同一性の確立などの課題を通過して，精神構造が強化固定された後，これらのパーソナリティの各部分の調和統合を行うことが構成春季の発達課題である」と述べている。このことから，青年期の終わり，成人期の始まりの間においては，両親からの脱備給は完了していることになる。

以上からも，両親からの精神的離脱は，第二次性徴の始まる12-15歳頃である思春期の前期から始まり，心身が調和統合され成熟する青年期の後期において完了すると考えられる。

Ⅱ．問題と目的

以上の研究史を踏まえ，両親の夫婦関係に対する青年の認知の変化について検討していく上で，以下に問題と目的を述べる。

青年期において，Blos, P.（1967）は，両親からの親から精神的に離れ，自立し，個を確立してゆく過程という意味で，青春期を第二の個体化の時期であると主張した。またBlos, P.（1967）によれば，18-22歳頃には自己のアイデンティティを確立し，親の生き方を受容できるようになるという。山本（2010）も，青年期後期に至っては，これまでの青年期との大きな違いとして，親との間の葛藤がほとんどなくなってくること，とくに同性親と和解していくことをあげている。これは親からの離脱あるいは分離に伴って行われるものと考えられ，またそのような青年においては，両親の夫婦関係を客観的に評価し，関わりを持つことが可能になると考えられる。

そこで本研究では，両親からの離脱が完了の段階にあるだろう青年期後期の22歳以降30歳未満の青年を対象にインタビュー調査を依頼し，半構造化面接により，両親の夫婦関係について12-15歳頃から現在に至るまでを想起しながら語ってもらうことで，青年の両親の夫婦関係に対する認知が両親からの離脱を通してどのように変化するかを検討することとした。

また，仮説は以下のように設定した。

（1）青年期の後期に当たっては，両親からの自立を通して，青年が両親の夫婦関係に対する認知が変化するだろう。

（2）また，その認知の変化は，両親夫婦関係をより客観的に評価できるようになるこ

とで示されるだろう。

Ⅲ．方　法

1．調査対象

調査協力者の両親が現在同居中であり，本人は調査協力者両親と別居をしている，青年期の後期にあたる男女にインタビュー調査を実施した（男性2名，女性8名，22～24歳，平均22.9歳）。これらは，縁故法により研究への協力を求めることができる心理系大学院生であった。また，自立の指標として，今回は青年が両親から物理的に離れて暮らしていることのみを条件として設け，その他経済的な自立などは含まなかった。

2．調査期間

2017年7月から9月。

3．調査方法

協力者とメールにて日程・時間・場所について調整し，同意書に付属したアンケート1枚とインタビューを実施した。調査場所は東京国際大学臨床心理センターまたは都内のプライバシーの保たれる貸し会議室を用いた。インタビューは半構造化面接で行ない，全員の面接記録を，同意を得た上でボイスレコーダーで録音した。インタビューの所要時間は一時間程度であった。インタビュー終了時には，謝礼としてQUOカード1,500円分を渡した。

4．調査内容

同意書に付属したアンケートは，以下の5点で構成した。年齢，性別，家族構成，同居・別居（期間）である。インタビューの質問項目は，以下の全8項目から成る。

質問項目

①あなたの12－15歳の頃についてお尋ねします、少し思い出して頂ければと思います。このころあなたから見て，あなたのご両親の関係はどのようなものだと思われましたか。

②今語っていただいた時期，あなたは当時ご両親の関係についてどのように感じていましたか。

③あなたは当時のご両親の関係について，現在振り返ってどのようなことを感じられますか。

④あなたの現在のことについてお尋ねします。あなたから見て，ご両親の関係はどのようなものだと思われますか。

⑤あなたは現在のご両親の関係について，どのようなことを感じていますか。

⑥12－15歳の頃から現在を通して，ご両親の関係にはどのような変化がありましたか。

⑦12－15歳の頃から現在を通して，あなたのご両親の関係について，あなたの見方・考え方にはどのような変化はありましたか。

⑧何かほかに，両親の夫婦関係について思うことや感じることはありますか。

（稲村・横山，2010）参考

5．分析方法

本研究では，木下（2003）による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTA）を分析手段として採用した。

6．倫理的配慮

調査協力者が家族に対し著しい悩みや問題を抱えている場合，家族間でのネガティブな記憶が想起される恐れがあり，そのために自尊心の傷つきや両親に対するネガティブな印象が引き起こされるリスクがある。そのため，調査協力への概要，対象者の意思により回答を中止できること，回答されたアンケートと面接で得られたデータは研究以外では使用されず，保管から処分まで個人の特定はされないこと，インタビュー内容の録音については同意を得られた場合のみ実施することを同意書に記載し，読み上げを行った。なお，今回の調査では，全員から録音データを得られた。

Ⅳ．結　果

本研究では，青年の両親の夫婦関係に関する認知がどのように変化するのかをテーマとして調査協力者にインタビューを行った。

1．調査対象者の概要（表1）

2．概念とカテゴリーの説明

半構造化面接から得られた録音データを逐語化したデータから，概念を生成していく。生成された概念の概念名，定義，具体例（ヴァリエーション）を分析ワークシートに記入する。概念同士の関係性を検討し，共通する複数の概念をまとめ，カテゴリーを作成した。

10名のインタビューにより，青年の両親の夫婦関係に関する認知に関する概念・カテゴリーは以下のように抽出された（表2）。

表1　調査協力者プロフィール

調査協力者	性別	年齢	両親との別居期間
No.1	女性	23	5年
No.2	男性	23	3ヶ月
No.3	女性	22	5年
No.4	女性	22	（3年と）4カ月
No.5	男性	24	6年
No.6	女性	22	4年4カ月
No.7	女性	23	4年6カ月
No.8	女性	22	5ヶ月
No.9	女性	24	5年
No.10	女性	24	5年6カ月

※（）部の期間は，研究協力者により，週末のみ実家に帰っていたとの申告があったもの。

表2　カテゴリー・定義・概念

カテゴリー	概念	定義	該当数
両親の夫婦関係に対する評価	普通の夫婦という評価	仲がいいときも悪いときもある普通の夫婦だったという評価。	4
	仲が良くなかったという評価	他の家庭（友達の家庭やTVで見る家庭）に比べて仲が良くなかったという評価。	2
両親の夫婦関係に対する印象の希薄さ	「夫婦」としての印象の希薄さ	子育てをする親，自分の母親・父親という印象が主である。自分が不在の際の両親に関するイメージをほとんどしない。	4
	両親同士のコミュニケーションの希薄さ	両親同士の間のコミュニケーションがあまりなかったために両親の関係についての印象が希薄である。	3
過去の両親の夫婦関係を想起することへの苦痛	過去の両親の夫婦関係を想起することへの苦痛	12-15歳頃は両親の夫婦関係・両親と青年の関係が悪化していたために忘れようとしている・思い出さないようにしていると感じている。	2

カテゴリー	概念	定義	該当数
過去（12-15歳頃）の自己中心性の自覚	自分自身が関心の中心であったという気づき	12-15歳ころは環境の変化や反抗期などがあり，自分のことが関心の中心だったこと，親に対して冷静になれない部分があったことから，自分の両親について深く考えることがなく，そのために一般的と捉えていた。	4
	反抗期での両親との対立	12-15歳頃は自身が反抗期であったがために両親（あるいは両親のどちらか）と対立しており，関係を避けていたがために，両親・両親の夫婦関係について印象が希薄である。	3
	両親への不満の先行	どのようなことが問題となっているかを客観的に考えるより，感情的に捉え嫌悪感を抱いていた。	2
夫婦で過ごす時間の増加	子どもが自立したことによる夫婦の時間の増加	子どもが別居を始めたことで，両親の二人きりの時間が増えた。	4
	夫婦での外出の増加	両親の二人きりの時間が増えたことで，両親二人での（娯楽のための）外出が増えた。	5
「夫婦」としての姿への新鮮さ	「夫婦」としての姿への新鮮さ	両親が会話・外出など，二人でのコミュニケーションをとっていることについて意外さ，新鮮さを感じている。	3
夫婦間葛藤へのストレスの低減	夫婦間葛藤へのストレスの低減	両親の夫婦関係から距離を置いたことで，（両親の夫婦間葛藤の間で板挟みにされている感覚が減少したことにより），夫婦の関係を客観的に見ることができるようになったという感覚。	2
両親像の弱まり	両親が老いたという青年の実感	両親と距離を置いた結果，両親の老いを実感し，気にかけている。	2
	両親は完璧な人間ではないという気づき	親が完璧でなく，いいところもあれば悪いところもあるということが受け入れられるようになった。	2
両親の「大変さ」に対する配慮	両親の「大変さ」に対する理解	家事やアルバイトなど，自分の力で生活するようになったことや子育てなどで，これまで自分の世話をしていた両親の大変さを感じるようになった。	4
	子育ての負担に対する自覚	子育てが両親にとって大変な負担であったと感じるようになったと共に，子育てから手が離れたことで時間的・心理的な余裕が出てきたことによると考えている。	2
両親への感謝	両親への感謝	12-15歳の頃は自分は反抗期にあり両親の発言に反発もしていたが，現在ではその発言が自分を思ってのことだったのだと感じている。	2

カテゴリー	概念	定義	該当数
両親の夫婦喧嘩に対する考察	両親の夫婦喧嘩に対する分析	現在ではいさかいの原因について父親・母親双方に改善点があると考えるようになった。	2
	両親の夫婦喧嘩に対する公正な見解	現在では，父母のお互いの関わり方に問題を見出せるようになったという変化。	2
過去（12-15歳頃）の両親の夫婦関係の受け入れ	過去（12-15歳頃）の両親の夫婦関係の受け入れ	両親の夫婦関係は自分の人生の一部であり，変えられないものであるという受け入れ。	3
「普通」の夫婦関係ではなかったという気づき	「普通」の夫婦関係ではなかったという気づき	現在12-15歳頃の両親の夫婦関係について，現在改めて考えると普通ではなかったと感じられること。その理由として，他の家族の夫婦と比較ができるようになってきたことで「視野が広がった」と表現している。	2
両親の夫婦関係に対する不干渉	両親の夫婦関係の解消に対する消極的な肯定	両親の関係について，両親の関係の解消を両親が望むのであればと，消極的に肯定している。	2
	夫婦関係についての両親の改善点への指摘しづらさ	両親の夫婦喧嘩の原因について，母親・父親それぞれの改善点を見出すものの，それを父親・母親に伝えるのは，父親・母親を傷つけるのではないかと考え，難しいと感じている。	2
両親の夫婦関係に対する信頼感	熟年離婚に対する懸念の解消	両親の夫婦仲が比較的良好であっても，熟年離婚に対する懸念は存在していたが，現在では両親の夫婦関係に対する信頼感があり，それも解消された。	2
	夫婦関係のモデルとしての両親	現在の両親の夫婦関係について，肯定的に捉えているとき，両親の夫婦関係をモデルとして，現在のパートナーとの関係の参考にしている。	2

3. 青年の認知の変化のプロセスを示した結果図（図2）

4. ストーリーライン

12-15歳頃の両親の夫婦関係の認知としては，おおまかな【両親の夫婦関係に対する評価】が語られると同時に，【両親の夫婦関係に対する印象の希薄さ】があることが語られた。この【両親の夫婦関係に対する評価】は「普通の夫婦という評価」か「仲が良くなかったという評価」であった。【両親の夫婦関係に対する印象が希薄さ】は，12-15歳頃では，両親が子育てをする親，自分の母親・父親としての印象が主であり，自分が不在の際の両親に関するイメージをほとんどしないという「「夫婦」としての印象の希薄さ」や，そもそも両親同士のコミュニケーションがあまりなかったために両親の夫婦関係に対する印象が希薄であると考えている「両親同士のコミュニケーションの希薄さ」があるためであった。またそれに加え，現在から振り返った場合には【過去（12-15歳頃）の自己中心性の自覚】が成されたことから，12-15歳頃は自分に関心が向いていたため両親の夫婦関係は気にかけていなかったということや，【過去（12-15歳頃）の両親の夫婦関係を想起することへの苦痛】からあまり思い出さないよう

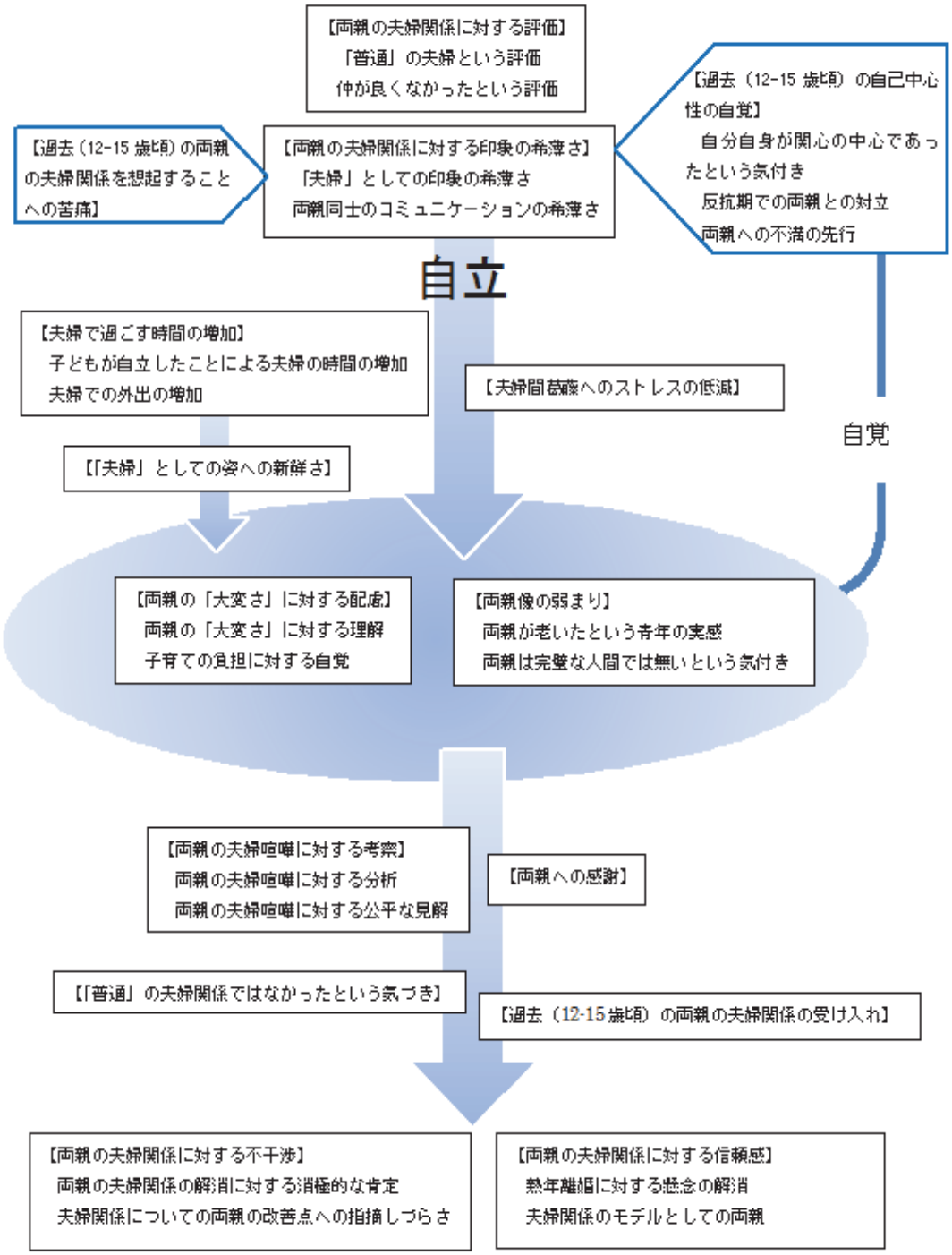

図２　両親の夫婦関係に対する認知の変化

にしているのかもしれないということが，【両親の夫婦関係に対する印象の希薄さ】の理由としてあげられた。

青年が自立すると，両親の夫婦関係の変化として【夫婦で過ごす時間の増加】，また青年自身の変化として【夫婦間葛藤へのストレスの低減】が生じた。【夫婦で過ごす時間の増加】を目にした青年は，両親の夫婦としてのポジティブなコミュニケーションに対して，両親に【「夫婦」としての姿への新鮮さ】を感じていた。同時に，両親にそうした時間的・心理的な余裕ができたことで，青年は「子育てに対する負担の自覚」をしていた。また，【夫婦間葛藤へのストレスの低減】が生じたことにより，青年は両親の関係について客観的に見ることができるようになったと感じていた。

これらの自立による生活の変化を通して，両親と距離を置いたことにより【両親像の弱まり】を体験していた。また親の元を離れ自分の力で生活するようになったこと，また青年が自立した後両親の生活に余裕ができた（【夫婦で過ごす時間の増加】）ことで，【両親の「大変さ」に対する配慮】をするようになっていた。【両親「大変さ」に対する配慮】は，その「大変さ」のなか両親が自分を育ててくれたことに対する【両親への感謝】にもつながっていた。

【両親像の弱まり】や【両親の「大変さ」に対する配慮】を通して，両親を客観的に見ることができるようになったことから，両親の夫婦喧嘩に対してただネガティブな感想を抱くだけにとどまらず（【過去（12-15歳頃）の自己中心性の自覚】の「両親への不満の先行」），「両親の夫婦喧嘩についての分析」や「両親の夫婦喧嘩に対する公平な見解」など，【両親の夫婦喧嘩に対する考察】をすることが可能になった。また，ほかの家庭の夫婦と改めて比較し，【「普通」の夫婦関係ではなかったという気づき】があったり，12-15歳頃の両親の夫婦関係について，全面的にいいとは思えなくとも，それも自分の人生の一部であるという【過去（12-15歳頃）の両親の夫婦関係の受け入れ】ができるようになったりしていた。

現在の両親の夫婦関係については，ここまで両親が夫婦として連れ添ってきたという事実から【両親への夫婦関係に対する信頼感】を持つことができたために，「熟年離婚に対する懸念の解消」がなされたり，さらには自分が異性と関係を築く際の「夫婦関係のモデルとしての両親」とすることができるようになっていた。しかし一部，夫婦関係についてネガティブな印象がある場合は，両親の夫婦関係から距離を置いたことで，「両親の夫婦関係の解消についての消極的な肯定」を抱いていたり，【両親の夫婦喧嘩に対する考察】は行うが，それを両親への気遣いのために「夫婦関係についての両親の改善点への指摘しづらさ」から言及しない【両親の夫婦関係に対する不干渉】の態度をとっていることもあった。

V．考　察

1．カテゴリーについての考察

本研究では，青年期の後期に当たっては，両親からの自立を通して，青年が両親の夫婦関係をより客観的に評価できるようになるだろうという考えのもと，青年の両親の夫婦関係に関する認知が，青年期のはじめから終わりにかけて，自立を通してどのように変化するのかに焦点を当て，探索的に研究を行った。ここでは，結果から得られたカテゴリーについて，青年の両親の夫婦関係に関する認知がどのように変化したのかを検討していく。

A．12-15歳頃の両親の夫婦関係に関する認知・印象について

ここでは【両親の夫婦関係に対する評価】，【両親の夫婦関係に対する印象の希薄さ】を中心として検討していく。

12-15歳頃の両親の夫婦関係に関する認知・印象としてはまず，夫婦仲の良し悪しに対しての【両親の夫婦関係に対する評価】があったが，また同時に【両親の夫婦関係に対する印象の希

薄さ】についても言及された。これは，稲村・横山（2010）の「10歳の頃の両親の夫婦関係はあやふやであったと感じており，当時の夫婦関係についてはその良し悪しの評価，あるいは具体的な関わりの評価が中心であったと感じているようだった」と一致する。しかし本結果からは，【両親の夫婦関係に対する印象の希薄さ】について，単に時間経過による記憶の薄まり以外にも要因があることが考えられる。まず，【両親の夫婦関係に対する印象の希薄さ】に属する「両親同士のコミュニケーションの希薄さ」の概念から，青年は自らの12-15歳頃について，両親に対し子育てをする親，自分の母親・父親という印象が主であったために両親を「夫婦」として見ていなかったということや，両親同士のコミュニケーション場面をあまり目にしていなかったために，両親の夫婦関係についての印象が希薄であったと考えていた。さらに，青年は12-15歳の頃の自分について振り返った際に，【過去（12-15歳頃）の自己中心性の自覚】もその理由のひとつであると述べている。これは，皆川（1980）の述べるように「前思春期の成長加速現象は心身の平衡を乱し，子供たちの精神を不安定にする」ことや，初期青春期において「両親表象から脱備給されたリビドーは一部，自己愛リビドーに変換されるので，この時期に少年少女の万能感は高まり，現実検討識は低下する」ことから，不安定な自分の状態やそれを安定させることが関心ごとの中心となったり，またそのために客観性を欠いたりする。このような状態にあって，青年は両親を自分の「親・養育者」として見ており，一人の人間として見ることが難しいため，母親を父親の妻，父親を母親の夫として捉えることは難しいようである。そのため，自分の不在の際の両親が夫婦としてどのように過ごしているかなどについて思いをめぐらすこともほとんどないものと考えられる。

B. 青年の自立後の青年・両親の夫婦関係の変化

ここでは，【夫婦で過ごす時間の増加】，【「夫婦」としての姿への新鮮さ】，【夫婦間葛藤へのストレスの低減】を中心に検討していく。【夫婦で過ごす時間の増加】は，両親の夫婦関係における変化であり，【「夫婦」としての姿への新鮮さ】，【夫婦間葛藤へのストレスの低減】は青年自身の変化である。

【夫婦で過ごす時間の増加】について，これは稲村ら（2010）でも述べられているような，「両親の夫婦関係表象の変化体験のきっかけ」のひとつ，「子どもが成長し，子育てが終わって，両親は自分自身の，あるいは夫婦としての生活を営むようになったと感じる」という「両親自体が変化したという体験的側面」にあてはまる。

青年は両親の【夫婦で過ごす時間の増加】を目にし，【「夫婦」としての姿への新鮮さ】を感じる。自立する前では，両親の「夫婦」としての時間を想像してこなかった青年は，ここにおいて自分が不在の間，実際に両親が「夫婦」として時間を過ごしていることを，両親から聞いて知るのである。これは両親に，自分の親としての営みだけでなく，夫婦としての営みがあるということの想像を意識する助けになるのではないだろうか。

【夫婦間葛藤へのストレスの低減】に関して，亀口（1992）は，家族システム論において「夫婦間に葛藤がある場合，子どもがそれに巻き込まれ，どちらかの親を選択せざるを得ない状況に陥ることが示唆される」とした。また川島ら（2008）も，両親間の葛藤に対して自らが何らかの立場を取ることを「巻き込まれ感」として重視し，「両親間葛藤が深刻なほど葛藤への巻き込まれ感が強まり，さらに両親の夫婦間葛藤に対する自己非難と恐れの認知につながっていた」としている。【夫婦間葛藤へのストレスの低減】においては，この「巻き込まれ感」が，両親と物理的に距離を置くことで緩和され，自覚できるストレスの低減につながったのではな

いかと考えられる。

C. 12-15歳の頃から現在にかけての両親・両親の夫婦関係についての見方の変化

ここでは，【両親の「大変さ」に対する配慮】，【両親像の弱まり】，【両親への感謝】を中心に検討していく。

落合（1995）は，心理的離乳を5段階に分けて論じている。また5段階目を，心理的に離乳した状態として，「親もまた自分と同じ人間であることを知った青年は，自分と同じように，親もまた自分を頼りない人間だと思っていることを知る。迷いながら，親もまた将来を先取りすることができず生きていることを知る。さらには，若々しいこれから成長の頂点に立とうとしている青年である自分に比べ，親は衰退的発達の方向にあり，杖なくしては歩けなくなっていることも知る」と述べている。【両親像の弱まり】における，青年は両親が老いたことを実感し，完璧な人間ではないと気づくことはこれにあてはまると考え，両親から離脱したことにより，両親の欠点や弱さ，両親なりの悩みに気づくようになったこと，また両親が老いて肉体的に自分より弱い存在になりつつあることから，それまでの両親に抱いていたような力強いあるいは完璧な両親の姿が衰退することを，ここでは「弱まり」と表現することとした。

【両親の「大変さ」も対する配慮】に関しても，家事やアルバイトなど，自分の力で生活するようになったことなどで，これまで自分の世話をしていた両親の大変さを感じるようになったこと，また子育てが両親にとって大変な負担であったと感じるようになったことがあげられている。これは，親を一人の人間として捉えられるようになったことで，両親の働きを自分への当然の庇護としてではなく，一人の人間が負う負担として慮れるようになったということであるだろう。また，小此木（1979）は，「思春期の親離れ，子離れの現象もまた，両者の年代的変化により脱錯覚の現象である。幼い子どもたちは，父母を実際の存在以上に美化したり理想化することで，よい子になり，言うことを聞いてきた。ところが思春期に入ると，批判力が高まり，親を一個の男性，女性と見ることができるようになっていく」としている。【両親像の弱まり】，【両親の「大変さ」に対する配慮】もこの脱錯覚に当てはまるだろう。また，そうして対象を喪失した後のつぐないとして，両親のこれまでの自分に対する養育が大変であったのだと自覚する気持ちや【両親への感謝】など両親を慮る気持ちが表現されたのではないだろうか。

D. 現在の両親の夫婦関係に対する認知・印象

ここでは，【両親の夫婦喧嘩に対する考察】，【「普通」の夫婦関係ではなかったという気づき】，【過去（12-15歳頃）の両親の夫婦関係の受け入れ】，【両親の夫婦関係に対する不干渉】，【両親の夫婦関係に対する信頼感】を中心に検討していく。

【両親の夫婦喧嘩に対する考察】は，稲村ら（2010）の両親の夫婦関係認知における「実際に対立しているなどという行動レベル」にあたると考えられるが，このカテゴリーではさらに両親の夫婦喧嘩について父親・母親の双方への対応の問題点を見出したり，改善点について考えたりというような「両親の夫婦喧嘩に対する分析」や，両親の夫婦喧嘩について，12-15歳時よりも父親・母親に対する感情の起伏や贔屓目の偏りが比較的少なくなったことで「両親の夫婦喧嘩に対する公平な見解」が持てるようになったことなど，「行動レベル」で認知したことの考察を含んでいた。このような視点も，両親を批判的に見ることができるようになったこと，父親・母親の一人の人間としての欠点を許容できるようになったことによると考えられる。

【両親の夫婦関係の「普通」との違いの気づき】は，12-15歳頃の両親の夫婦関係について両親の態度や夫婦関係について「普通」であると感じていたが，現在考えてみると「普通」ではない・なかったと感じていることを示している。この「普通」でない・なかったというのは，両

親の夫婦関係における不仲や両親の自分に対する教育などに関するネガティブな意味合いを含んだものであった。また，これについては，両親への違和感に気づいたことを「視野の広がり」があったためとしている。この「視野の広がり」は，両親を批判的・客観的に捉えられるようになったことを指していると考えられる。

【過去（12-15歳頃）の両親の夫婦関係の受け入れ】について，これは両親の夫婦関係に対して全面的に肯定できなくとも，これまで目にしてきた両親の夫婦関係も自分の人生の一部であり，変えられないものであるとの受け入れであった。これは，先にも述べたような【両親像の弱まり】や【両親の「大変さ」による配慮】などの両親からの脱錯覚を受け入れることによってなされると考えられる。これまでの両親の夫婦関係を変えられないものとして受け入れることは，両親の夫婦関係の受け入れであると同時に，その家庭の下で生きてきた自己の受け入れでもあるのではないだろうか。

【両親の夫婦関係に対する不干渉】について，これは稲村ら（2010）の研究では類似した要素が見られないカテゴリーとなった。これは，両親の夫婦関係について，両親の希望なら両親が夫婦関係を解消してもいいというような思いを抱いている「両親の夫婦関係に対する消極的な肯定」，両親の夫婦関係に改善点を見付けても，それを指摘することは，両親を傷つけるのではないかという懸念から指摘しづらさを感じ言及は避ける「夫婦関係についての両親の欠点に対する指摘しづらさ」から，両親の夫婦関係に干渉しない，さらに言えば両親の夫婦仲を取り持とうとしない態度が共通して見て取れるものである。

【両親の夫婦関係に対する信頼感】について，稲村ら（2010）では，「両親の夫婦関係表象の変化体験には，両親自体が変化したという体験的側面と自分自身が成長して変化したという体験的側面」があり，「これら二つが合わさったことで現在の両親への評価が形作られており，その結果両親を理想の夫婦とする気持ちが生まれるのであろう」としている。本結果からは，両親が理想の夫婦であるという内容の概念は生成されなかったが，【両親の夫婦関係への信頼感】を表すものとして，「熟年離婚に対する懸念の解消」，「夫婦関係のモデルとしての両親」が生成された。

「夫婦関係のモデルとしての両親」は，現在の両親の夫婦関係を肯定的に捉えているときに，両親の夫婦関係をモデルとして，現在のパートナーとの関係の参考にしていることから成る概念である。山内ら（2008）の研究においても，「両親の夫婦関係は，それに対する青年の主観的評価が高いときのみ，青年の恋愛関係に影響を与えていることが示される」としていることからも，「夫婦関係のモデルとしての両親」は両親の夫婦関係を肯定的に捉えていることを条件に成り立つものであると考えられる。また，青年期の後期において，両親から離脱した青年は新しい対象と関係を築き始める。乾（1985）によれば「新しい依存対象の獲得は，親との関係ほど確かな確固たる物とはいまだなりえず手ごたえのない試みとなりやすい」。現在のパートナーとの関係において両親の夫婦関係を参照することは，モデリングとしてはもちろんだが，パートナーとの関係の安定を模索する上で，同性親を参考にしたり，両親の夫婦関係のポジティブな要素を自分とパートナーとの関係に重ねたりすることで安心感を得ることを含むのだろうと考えられた。

また，【夫婦関係のモデルとしての両親】の対立するヴァリエーションとしては，以下のものが見られた。

> “あと，自分の恋愛関係もそうかもしれないです。なんかこう異性と話す時に，楽しくなったりとか，うまくコミュニケーション取れたりすると，そういうのって多分父親と母親の関係で見てなかったところで，でもつきあうと自分がこういうふうになって，夫婦とカップルの，カップルの先に結婚とかあると思うんですけど，そういうところで夫婦になったら全然今までの家族とは違う感じになるんじゃないかっていうのはありますね”（No.6）

両親の夫婦関係と比較している点では同様だが，この場合，現在のパートナーと自分の関係に，父親と母親の夫婦関係にはなかったものを見出し，自分は両親とは違う夫婦関係を築くのではないかと感じている。山内ら（2008）も「両親の夫婦関係に対して青年がどのような価値づけを与えるのかによって，自身の恋愛関係や結婚観への影響が変化しうる」ことを示唆している。両親の夫婦関係に対し青年がどのように価値づけるのか，またどのように取捨選択を行い取り入れていくのかについての詳細は，ここでは明らかにはならなかったが，両親の夫婦関係に対し青年が受ける影響は，一方的・受動的なばかりではないとここでは言うことができるだろう。特にここでは，異性とのコミュニケーションにおけるポジティブな体験が，夫婦観に対する印象の変化につながっているようである。

2. 全体考察

青年の最終的な変化としては，大きく2つが上げられた。ひとつは，両親の夫婦関係に干渉しない，さらに言えば両親の夫婦関係の継続のために，間を積極的には取り持とうとはしなくなることである。これは，青年が両親から離脱する以前よりも，両親の夫婦関係の崩壊に対して恐れを抱かなくなったことによるものと考えられる。ふたつめは，長年連れ添い家族内で発生する問題を乗り越えてきた両親の夫婦関係に信頼感を抱き，青年がこの時期にパートナーとの関係を模索する際，両親の夫婦関係を参考にすることである。

この最終的な変化のうち，【両親の夫婦関係に対する不干渉】に属する「両親の夫婦関係に対する消極的な肯定」は，両親の夫婦関係について比較的好ましくない印象を抱いている青年のヴァリエーションから構成されていた。また，【両親の夫婦関係に対する信頼感】に属する「夫婦関係のモデルとしての両親」は，両親の夫婦関係について比較的好ましい印象を抱いている青年のヴァリエーションから構成されていた。このような差が見られたことについて，以下に検討したい。

「両親の夫婦関係に対する消極的な肯定」は，両親の夫婦関係について解消を想定していることから，「熟年離婚に対する懸念の解消」がなされていないものと考えられる。だとするならば，この「熟年離婚に対する懸念の解消」が成されるためには，両親が夫婦として長く連れ添ってきたという事実以外にも条件が存在するのではないだろうか。稲村ら（2010）は，「夫婦関係の変化は，家族の中に問題が勃発することなどによって起こるが，おおむねその変化は両親の結びつきを変化させる方向に作用していると感ぜられるようであった」としている。家族内で生じる問題を両親が乗り越えられず，「熟年離婚に対する懸念の解消」がなされなかった際に，両親の夫婦関係が解消する可能性が予期され，「両親の夫婦関係に対する消極的な肯定」につながるのではないだろうか。家族内での問題や夫婦間葛藤自体は，程度によるもののどの家庭でも存在するものだが，それを乗り越える姿を青年が目にすることができたかが，「両親の夫婦関係に対する消極的な肯定」の有無に関わるのかもしれない。

「夫婦関係のモデルとしての両親」を構成する2名は，両親の夫婦関係に対して比較的好ましい印象を抱いていることに加え，現在の交際相手との結婚を意識しているようだった。乾（1985）は，恋愛というのはお互いのパーソナリティが相思相愛であればいいが，結婚というのは，これに加えて教育的な役割や，あるいは社会的な役割というような役割をお互いが持つこと，および二人の生き方の一致も必要となる，すなわち社会的契約とともに，双方のアイデンティティをきっちり決めていなければ，結婚することはなかなか難しいと述べている。このことからも，結婚を意識した恋愛とそうでない恋愛は今後の社会的な役割や生き方に関与するか否かという点で異なるものである。「夫婦関係のモデルとしての両親」は，両親の夫婦関係に対して比較的好ましい印象を抱いていることに加え，現在の交際相手との結婚を意識して

いることが条件として表れたのではないだろうか。また，山内ら（2008）によれば，「両親の夫婦関係が青年の恋愛関係に与える影響に関する知見には交錯が見られる」。本研究からは，青年が現在交際相手と結婚を意識した付き合いをしているか否かが条件に含まれていなかったことが，その理由としてあげられるのではないかと考えられた。今後両親の夫婦関係に対する認知の変化を検討する上では，交際相手の有無，交際相手との結婚の意思の有無，既婚・未婚など，これらの条件も含めて検討していくことが望ましいと考えられる。

以上の本研究の結果から，仮説に設定した（1）青年期の後期に当たっては，両親からの自立を通して，青年の両親の夫婦関係に対する認知が変化するだろう，（2）またその認知の変化は，両親夫婦関係をより客観的に評価できるようになることで示されるだろう，の二点が支持された。

今回の研究では，特に両親の夫婦関係に好ましい印象を抱いている場合，また特に好ましくない印象を抱いている場合に見られるだろう概念が出現した。特に本研究においては最終的な変化に当たる【両親の夫婦関係に対する信頼感】の「夫婦関係のモデルとしての両親」，【両親の夫婦関係に対する不干渉】の「両親の夫婦関係の解消に対する消極的な肯定」である。今回は群分けによる検討は行わなかったが，研究協力者をさらに募ることで，両親の夫婦関係に好ましい印象を抱いている群，また特に好ましくない印象を抱いている群の間により明確な差異が現れるかもしれない。

3. 本研究の課題と今後の展望について

本研究では，研究協力者の数が少なかったこと，カテゴリー数が多くまとまらなかったことなどから，理論的飽和化が成されなかったと判断される。そのため，本研究の結果図・ストーリーラインの信頼性については，課題の残るところである。またこのことから本研究で得られた結果・考察は，ひとつの可能性について言及するものである。

今回の研究では，いくつか特に両親に夫婦関係に好ましい印象を抱いている場合，また好ましくない印象を抱いている場合に見られるだろう概念が出現したが，ここではそれぞれを群に分けて言及するには限界があった。本研究のインタビュー調査は10名であり，調査対象者は十分ではなかったと言える。また，男女差についても同様である。今回の研究では男性2名，女性8名と偏りが見られたことに加え，調査対象者数の関係から性差の検討を行わなかった。両親からの離脱は，青年期であれば男女に共通して見られるが，結婚観への影響など，性差への検討も望まれる。

また本研究では，調査協力者の心理的負担を考慮して，調査協力者は比較的精神が安定しており，健康度の高い青年期の後期の男女であることが求められた。そのため現在心理系大学院に通っている，内省力を備えた大学院生を対象としたが，調査協力者に大きな偏りが生じていることから，一般化が困難な可能性があるという問題が生じる。一般化可能性を検討するためにはさらにさまざまな背景を持つ青年を対象に研究を行っていく必要があるだろう。

以上から，青年の性差を含めた十分な研究を行うに当たっては，青年期後期にあたる男性10 ～ 15名，同じく女性10 ～ 15名程度，両親の夫婦関係に対する印象の正負に関しても分けて検討するのであれば，男性20 ～ 25名程度，同じく女性20 ～ 25名程度の協力が得られるのが望ましいと考えられる。

今回は12-15歳頃の両親の夫婦関係に対する認知を問う場合に，回想法を用いた。今回，青年が現在から12-15歳頃の両親の夫婦関係について振り返ることで得られた変化もあったため，振り返る行為そのものにも意味があったと考えられるが，インタビューをとる上では両親の夫婦関係について過去に感じていたことと，過去の両親の夫婦関係について現在振り返って感じられることが混同されることもあったため（インタビュー中にその都度確認を行った），

12-15歳頃から現在にかけての変化のみをとることを目的とした場合には，縦断的研究を行う必要があるだろう。

また，本研究内では言及できなかったが，今回のように回想法を用いて今後研究が行われる際は，現在の両親との関係が，過去の両親の夫婦関係の捉え方に影響を与えるであろうことも，今後含めて検討されるべきである。

謝　辞

本論文を作成するにあたり，たくさんの方々にお世話になりました。ここに心から謝辞を述べさせていただきます。

本研究を進めるにあたって，小田切紀子教授には，要所で適切なご指導を賜りました。研究をまとめるにあたり大切なことをたくさん学ばせていただきました。心より感謝申し上げます。

また，本研究の副査読者を快くお引き受けくださいました妙木浩之教授に深く感謝申し上げます。

最後に，貴重な時間を割いて調査に協力してくださったすべての方にこの場を借りて御礼を申し上げます。

皆様のおかげで，本研究が論文として完成いたしました。重ねて御礼申し上げ，謝辞とさせていただきます。

引用文献

Blos, P. (1962). On Adolescence. Free Press, New York.　野沢栄治訳（1967）．青年期の精神医学．誠心書房.

Grych & Fincham (1992). Assessing Marital Conflict from the Child's Perspective: The Children's Perception of Interparental Conflict Scale. *Child Development*, 63, 558-572.

Grych & Fincham (1993). Children's appraisals of marital conflict: initial investigation of the cognitive-contextual framework. *Child Development*, 64, 215-230.

稲村加奈子・横山恭子（2010）．青年期における夫婦関係表象の変化体験：健常群へのインタビューとFITから．上智大学心理学年報，34，43-54.

乾　吉佑（1985）．青年期後期の精神療法．小此木啓吾・岩崎徹也・橋本雅雄・皆川邦直編．岩崎学術出版社.

亀口憲治（1992）．家族システムの心理学〈境界膜〉の視点から家族を理解する．北大路書房.

笠原　嘉（1980）．今日の青年期精神病理像．笠原嘉・清水将之・伊藤克彦編．青年の精神病理1．弘文堂.

川島亜紀子・眞榮城和美・菅原ますみ・酒井　厚・伊藤教子（2008）．両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連．教育心理学研究，2008，56，353-363.

木下康仁（2003）．グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践――質的研究への誘い――．弘文堂.

木下康仁（2007）．ライブ講義M-GTA．弘文堂.

西村洲衛男（1978）．思春期の心理．中井久夫・山中康裕編．思春期の精神病理と治療．岩崎学術出版社.

皆川邦直（1980）．青春期・青年期の精神分析的発達論　ピーター・ブロスの研究をめぐって．小此木啓吾編．青年の精神病理2．弘文堂.

小此木啓吾（1980）．青春期・青年期の精神分析的発達論と精神病理．小此木啓吾編．青年の精神病理2．弘文堂.

小此木啓吾（1979）．対象喪失　悲しむこと．中公新書.

落合良行（1995）．心理的離乳への5段階仮説．筑波大学心理学研究，17，51-60.

落合良行・佐藤有耕（1996）．親子関係の変化から見た心理学的離乳への過程の分析．教育心理学研究．44，11-22

宇都宮博（1999）．青年がとらえる両親の夫婦関係－親子関係，家族システムとの関連．日本家政学会誌．50，5，455-463.

宇都宮博（2004）．両親の夫婦関係に関する認知が子供の自己肯定に及ぼす影響　――女子青年の場合――．日本健康心理学研究．17，2，1-10.

宇都宮博（2005）．女子青年における不安と両親の夫婦関係に関する認知――子どもの目に映る父親と母親の結婚生活コミットメント――．教育心理学研究，53，209-219.

山本　晃（2010）．青年期のこころの発達：ブロスの青年期論とその展開．星和書店.

山本倫子（2012）．青年期の子どもが認知した夫婦間葛藤と精神的健康との関連．家族心理学研究．26，1，83-94.

山内星子・伊藤大幸（2008）．両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響:青年自身の恋愛関係を媒介変数として．発達心理学研究，19，3，294-304.

Abstract

A Study of Adolescent Cognitive Changes toward Marital Relationship of Their Parents —As the Subject of Late Adolescences—

Yuka Sato

In this study, the adolescences in the stage of the separation from their parents are asked about marital relationship of their parents from the past (until 12 from 15 years) up to the present in semi-structured interview. Thereby, the author examined how to change the adolescent cognition of marital relationship of their parents throughout the separation from their parent and figured out FIG and story line. As the results, first, they no longer got involved marital relationship of their parents. secondly, they trusted marital relationship of their parents. And they referred to marital relationship of their parents when they seek their relationship with their partner.